発達障害に対する理解と支援

―自閉症スペクトラム障害に視点をあてて

楠 凡之
北九州市立大学

1. 自閉症スペクトラム障害の女性の手記から

私は保育園から小・中学時代、クラスのボス的な人などから嫌がらせや仲間はずれのようなことをいつもされていました。物はよく盗られました。小3と中2の時、溜めていたものが爆発し、クラスの中で突然大泣きしてしまったこともあります。けれど、自分の正直な気持ちを言葉で伝えることはとても困難でした。たぶん親はこのような学校での出来事を知りません。

小学校時代は集団下校をしなければならず、当時は毎日、他人の荷物持ちでした。私は嫌となかなか言えず、またよほどのことがないと泣けず、からかうとオモシロイと思われていたようです。自分に原因があるのだと思いますが、どこが変だったのか、自分ではよくわかりません。このような経験からあまり集団には近づかないようになりました。

自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorders 以下、ASDと表記します）の子どもがその独特の言語表現や集団内の「暗黙のルール」がわからないため、いじめの標的にされてしまうことはしばしばあります。そのようないじめ被害などの否定的な体験がその後の自我の育ちにも大きな否定的な影響を与えてしまうことも少なくありません。

2. 小学校段階の発達障害の子どもへのいじめ

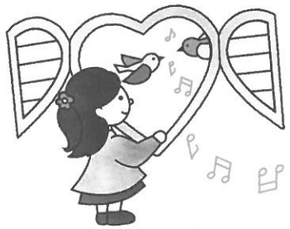
通常学級にいるASDの子ども（特に未診断の子ども）の多くが小学校中学年頃からいじめ被害を体験しています。ここでは、ある学生が自分のいじめ加害体験について書いたレポートを紹介します。

小4の時、自分はあるグループに混ざって1人の女の子をいじめてしまった経験がある。

第2回

発達障害の子ども・青年の抱える生きづらさを考える　その2

―自閉症スペクトラム障害の子どもといじめ問題



くすのき　ひろゆき／1960年、大阪生まれ。専門は、いじめ、不登校、発達障害の問題に焦点をあてた臨床教育学。著書に、『保育と教育のための発達診断』（全障研出版部、共著）『自閉症スペクトラム障害の子どもへの発達援助と学級づくり』（高文研）、『いじめと児童虐待の臨床教育学』（ミネルヴァ書房）など

Aさんは他のクラスメイトとはどこか雰囲気が違っていた。独り言が他の人より多く、鉛筆を噛む、爪を噛む、指を机に当てて音を鳴らすなどの変わった癖があった。当時の私たちから見るとそれは異常な光景だった。

3年の時には何もなかったが、4年生になって事態は一転した。B君がAさんに対して、「あいつは気持ち悪い。変人だ」などと悪口を言うようになったのだ。Aさんはこのような悪口に対して何も言い返すことはなかった。それがB君にはよけいに気に食わなかったのだろう。「死ね」「穢(けが)れる」という言葉は当たり前になった。私は当初はその光景を見ているだけだったが、B君と仲が良かった友達と私も仲が良く、ある日を境に私も悪口を言うようになってしまった。今思うと本当に馬鹿なことをしたとしか思えない。

本人には「このことを先生に言ったらどうなるかわかるよな？」などと脅しをかけ、ひたすら悪口を言った。やがて私たちのグループだけでなく、クラスの大部分がAさんを避けるようになり、Aさんは学校にきても1人で読書をする生活を送っていた。それを見て「友達いないんじゃない？」などとからかった。Aさんへのいじめはどんどんヒートアップし、物を隠したり、わざと鉛筆をあげたり（鉛筆を噛む癖を見たいため）していた。クラスのほとんどの人がいじめに参加しており、誰も止められなかった。B君をはじめその時の私たちはAさんへのいじめを楽しんでいたようにしか思えない。

当時、私は学校に行くのがいやだったが、いじめによって学校に行くことが楽しくなった。いじめという行為がその精神的不安をなくしてくれたのだろう。4年生の1年間は本当にAさんへのいじめで過ごした1年だったといっても過言ではない。

小5になり、私は3年連続でAさんと同じクラスになった。小5になってもAさんへのいじめは続いた。私は何も言わないようになったし、いじめたことへの後悔の気持ちを知った。しかし、私はAさんへのいじめを止められなか